

【研究ノート】

太宰治『津軽』外ヶ浜ルート of 観光資源としての可能性

The possibility of Osamu Dazai's *Tsugaru* Sotogahama route as a tourism resource

金 二城

青森大学社会学部

Abstract

This study examined the possibility of the Sotogahama route in Dazai's novel *Tsugaru* through field research. *Tsugaru* is a novel by Dazai, who was asked by a publishing company to write a novel about his travels in the *Tsugaru* region where he was born and raised. In particular, we were able to confirm that the episodes of his visit to Sotogahama and the places he visited could lead to an understanding of Dazai and the region. However, Dazai's travels in Sotogahama are not well known, and there are no tourist programs that allow visitors to re-experience Dazai. There is an urgent need to develop programs that allow visitors to experience of Dazai's travel and the unique characteristics of *Tsugaru*.

Keywords ; Dazai Osamu, *Tsugaru*, Sotogahama, identity, tourism resource

1. 問題提起

筆者は2022年6月19日、太宰治の小説『津軽』の旅行コースの一部である外ヶ浜ルートを廻った。その目的は『津軽』の外ヶ浜ルートの観光資源としての可能性を探ることであった。偶然にもこの日は太宰治の生まれた日でもあり命日でもあった。

外ヶ浜ルートは青森を出発して、蟹田から津軽半島の最北端である竜飛崎まで辿るコースだ。小説『津軽』は序論につづき、「巡礼」、「蟹田」、「外ヶ浜」、「津軽平野」、「西海岸」の5つの章から構成されており、本稿で述べる外ヶ浜ルートは「蟹田」と「外ヶ浜」の章で描かれているルートである。

『津軽』は太宰治が或る出版社から頼まれて、生まれ育った津軽地域の隅々まで旅した内容を小説化した作品である。歴史的な事実など少し難しい所もあるが、紀行文に近いこの小説は津軽がどういう地域なのかだけではなく、太宰治の人柄も見えてくる貴重な作品である。旅行をしたのは1944年(昭和19年)で、太宰の人生の中ではもっ



図1 津軽半島の地図 (地理院地図に加筆)

とも安定した良好な時期であった。

筆者は、2022年5月のはじめ、太宰治の『津軽』に出てくる蟹田から竜飛崎までのルートを廻るために、インターネットで検索したが意外にも外ヶ浜での太宰治の訪問地に関する詳しい情報を手に入れることが出来なかった。太宰治が生まれ育った金木町の周囲に関してはいくつかのルートがあったが、外ヶ浜に関するルートはなかなか見つからなかった。そのため、筆者は『津軽』をもう一度読み直し、筆者なりの、『津軽』外ヶ浜ルート」を構想してみた。それは、蟹田—観欄山—今別—本覚寺—三厩—義経寺—(旧)奥谷旅館—竜飛崎を辿るルートである。

そして、実際にこのルートを一日で廻った結果、『津軽』の外ヶ浜のストーリーを実感でき、外ヶ浜の素晴らしい自然、文化に出会うこともできた。しかし、『津軽』を活かした跡地が少なく、蟹田から竜飛崎までのルートを貫くストーリーも見えなかったほか、いくつかの町は過疎化しており、元気がないように見えた。

そこで、『津軽』外ヶ浜ルートがあれば、太宰治の素直な人柄を知ることにつながり、魅力的な観光資源で地域活性化にも貢献できるのではないかと考えた。それでもう一度、メンバーを追加して廻る事にした。

なお、本稿に引用した『津軽』の文章の後には、引用元である角川文庫の掲載ページを括弧書きで付けている。

2. 外ヶ浜を見つめる：外ヶ浜を辿ってみる

6月19日朝8時、筆者と教員2名、客員教授1名、学生2名の計6名が青森駅に集まり一緒に外ヶ浜へ向かった。途中、「マルシェよもぎた」で陸奥湾を眺めながら休憩をとり、その後、蟹田に向かった。それほど時間的な余裕がなかったので蟹田駅と駅前の市場ウェル蟹は車窓からの見学にして、観欄山に向かった。入口には駐車場がなかったので、そのまま車で山に向かって登ると、専用の駐車場があり、そこに車を止めて、太宰治文学碑がある展望台のほうに移動した。

ここを前回訪問した時は、ほとんど手入れがされていなかったが、今回は草刈をしている人がいた。軽く挨拶をしたら、草刈をやめて太宰治の文学碑について積極的に解説してくださった。この

方はなんと外ヶ浜太宰会の会長で、太宰治と友人らが花見の宴を開いた位置、記念碑の岩を宇田海岸からわざわざ運んで来た理由など、大変貴重なお話を伺うことができた。特に観欄山の文学碑はN君が中学生時代に太宰治と一緒に座り未来を語った岩で、その思い出のために遠い海岸から運んで来たという話には驚いた。

次に、平館台場跡を経て今別町に入り、赤岩がおいてある砂ヶ森、高野崎、^{いがまざき}鑄釜崎を訪れた。この日の天気予報は時々雨と雷雨だった。ちょうど平館台場跡についた時は大雨になったため、車から降りず車窓からの見学にした。

次は、県指定天然記念物である赤根沢の赤岩を訪ねた。赤岩は、貴重な塗料として古くから使われていた事、天然記念物だが管理がされていないことなどについて、同行した先生から説明があった。歴史、文化の資源として活かせる工夫が必要だと感じた。

赤岩を見た後は、高野崎でランチを食べて、少し周りを散歩した。高野崎には津軽方言詩人である高木恭造の文学碑が建てられてある。美しい陸奥湾の景色とは対照的な文学碑の悲しい詩の内容が印象的だった。高野崎の近くにある鑄釜崎には、ユニークな展望台、それに負けないくらい突き出た奇岩、壮大なオーシャンビューが我々を待っていた。

次の訪問地は本覚寺。今別は、『津軽』で「明るく、近代的とさえ言いたいくらいの港町である」と描写されており、また蟹田で会ったMさんのお家を訪れる場面が紹介されている。『津軽』では、太宰治がN君の勧めで本覚寺を訪れる場面が描かれているが、本覚寺は県重宝の青銅塔婆がある今別の歴史に関わる有名なお寺である。

『津軽』では、ここを訪れる際にリヤカー行商から鯛を買い、その鯛のことで面白いエピソードが展開される。

本覚寺の後は三厩駅に立ち寄った。三厩は津軽線の終点である。駅の周りを歩いた後、近くにある義経寺に向かった。車を近くの駐車場に止めて、義経寺へ歩き出した時、激しい雨が降り始めた。傘をもっていない人もおり、激しい雨だったので、残念だったが義経寺は次の機会に訪れることにした。

次には旧奥谷旅館と竜飛崎を訪れた。旧奥谷旅

館は、太宰と N 君が実際に泊まった旅館で、現在は竜飛岬観光案内所になっている。案内所に入っていくと、太宰と N 君が宿泊した部屋が復元、公開されており、当時太宰の食事などが再現されていた。ここは太宰治のストーリーだけではなく棟方志功などが泊まった痕跡なども紹介しているほか、竜飛の歴史や生活に関する写真や資料などが展示されていた。

そして、最後に竜飛崎を訪れた。太宰は竜飛の特徴を次のように述べている。

読者も銘肌せよ。諸君が北に向かってあるいている時、その路をどこまでも、さかのぼり行けば、必ずこの外ヶ浜街道に到り、路がいよいよ狭くなり、さらにさかのぼれば、すぼりとこの鶏小舎に似た不思議な世界に落ち込み、そこにおいて諸君の路は全く尽きるのである (p.113)。

ここは、ご存知のように津軽半島の最北端という地理的な象徴性もあり、他ではなかなか経験できない荒い風を経験することもできる場所である。

3. 『津軽』外ヶ浜ルートを廻ってみて

『津軽』外ヶ浜ルートを廻ってみて、筆者にはいくつかの可能性が見えてきた。

まず、このルートは、人間太宰治を知る上でもっとも重要なルートになるのではないだろうかということである。筆者は個人的に、太宰治の小説を知りたいなら『人間失格』を、人間太宰治を知りたいなら、『津軽』を読んでみるべきだと思っている。このことについては、外ヶ浜太宰会の会長もまったく同じことを考えていた。

実際、『津軽』には、素直な太宰治の姿が数多く出てくる。特に蟹田から龍飛崎までの旅行には、他の所を旅する時には見ることができない純粋な彼の姿が描かれてある。これは中学時代の親友である N 君とのやり取りがあるからであろう。時には真面目な、時にはユーモラスな彼の人柄と出会う。観瀾山の太宰治文学碑には「かれは人を喜ばせるのが何よりも好きであった」と刻まれてあるが、N 君など太宰治をよく知る人達から見るとこれがもっとも彼を表す言葉であるようだ。

そのため、太宰治を知りたい人にとって、『津軽』を読みながら蟹田から龍飛崎までの外ヶ浜ルート



図2 蟹田観瀾山太宰治文学碑

“かれは人を喜ばせるのが何よりも好きであった” (筆者撮影)

を辿って見るのは大変貴重な経験になるに違いない。

次に、この外ヶ浜ルートはこの地域の自然環境、文化のすばらしさを経験するためにも大変貴重なルートであるということである。蟹田から龍飛崎までは多彩な自然と文化を体感する事ができる。まずは、陸奥湾という独特なオーシャンビューを楽しめることで、ずっと海を眺めることができるが、観瀾山や義経寺のような小山からも陸奥湾を眺められ、高野崎や鑄釜崎の展望台からもオーシャンビューを楽しめる。また外ヶ浜の歴史や文化にもふれることができる。義経寺、本覚寺など太宰治が紹介して直接訪れた場所も少なくない。それ以外にも太宰治が訪れてない、赤岩、大平山元遺跡など、素晴らしい文化遺跡にも出会える。

4. 『津軽』を読み直す

以上のように、『津軽』外ヶ浜ルートを廻ってみると新しい、素直な太宰と出会うことができ、津軽の文化、自然についての理解を深めることができるともいえよう。しかし、このルートを廻る観光コースがないので、その基礎になるコンテンツに関する研究が必要だといえよう。そこで、『津軽』の中、特に外ヶ浜ルートの中で太宰と津軽がどのように描写されているのかを分析してみよう。

4-1. 『津軽』の中の太宰

『津軽』には太宰が実際に外ヶ浜を廻った時、

彼の性格，人柄が読み取れる多くのエピソードが描かれている。りんご酒かビールかについての話では彼の謙虚さが見えてくる。太宰は蟹田の友人 N 君に次のような手紙を送っている。

なんにも、おかまい下さるな。(中略)でも、りんご酒と、それから蟹だけは(p. 42)。

この手紙で N 君と N 君の奥さんは想像を掻き立てられた。なぜ太宰がわざわざりんご酒を頼んだのかについて意見が分かれたのだ。なぜ太宰はりんご酒を頼んだのだろうか。それは、この時は、ビールや日本酒よりりんご酒が手に入れやすかったことが一因のようだ。このりんご酒だが、現在はなかなか手に入れることができない。そのため、最近になって太宰が飲んでいたりんご酒を再生する事業も始まっている。

今別の本覚寺と三厩の旅館で鯛についてのエピソードがあるが、この場面では太宰のユーモラスな性格が読み取れる。太宰が鯛を買い、お寺に持って行く場面もそうだが、その日の夜、旅館で鯛の原形の塩焼きを眺めながらお酒を楽しみたかった太宰が、そのままの塩焼きをお願いしたところ、頭も尾もない塩焼きが出て来てがっかりする場面がそうである。この出来事に関しては、鯛の姿焼きにこだわった理由を次のように改めて述べている。

読者は、わかってくれるだろうと思う。私はそれを一尾の原形のままで焼いてもらって、そうしてそれを大皿に載せて眺めたかったのである。食う食わないは主要な問題でないのだ(p. 105)

この場面に関しては、牧野と柳澤は“鯛事件”と名付けて、その女中について、そして「なぜ鯛をそのまま塩焼きにしなかったのか？」についてそれなりの答えを探して、鯛事件ストーリーを深めている(2019, p. 128)。それだけ注目される出来事が外ヶ浜で起きている。これ以外にも特に太宰治と N 君とのやり取りの中でのユーモラスな場面がすくなくない。

彼がいかに情け深い人なのかについても外ヶ浜を廻る中で出会える。これは蟹田で出会った S さんとのエピソードで描かれている。

私は決して誇張法を用いて描写しているのではない。この疾風怒濤(とどう)の如き接待は、津軽人の愛情の表現なのである。(中略)読者もここに注目をしていただきたい。その日の S さんの接待こそ、津軽人の愛情の表現なのである。しかも、生粋の津軽人のそれである。これは私においても、S さんと全く同様なことがしばしばあるので、遠慮なく言うことができるのであるが、友あり遠方より来た場合には、どうしたらいいかわからなくなってしまうのである。ただ胸がわくわくして意味もなく右往左往し、そうして電燈に頭をぶつけて電燈の笠を割ったりなどした経験さえ私はある (p. 69)

これはまさに津軽人とはどういう人か、その情け深さについて知る事ができる場面だし、S さんと太宰自身を同一視する事で、自分が津軽人であり情け深い人である事をほのめかしている。

彼が節操ある性格の持ち主だったことが読み取れる場面も少なくない。例えば、食べ物に関しての彼の定めと、下記の自戒からも彼の人柄が見えてくる。

こんど津軽へ出かけるに当たって、心にきめたことが一つあった。それは、食べ物に淡泊なれ、ということであった (p. 36)

食べものには淡泊なれ、という私の自戒も、蟹だけには除外例を認めていたわけである (p. 42)。

それ以外にも、外ヶ浜の最終旅先である竜飛崎では太宰の真面目な性格と津軽人としてのコンプレックスを窺える場面も登場する。

私は、たまらない気持ちになった。いまでも中央の人たちに蝦夷の土地と思いきまれて軽蔑されている本州の北端で、このような美しい発音の爽やかな歌を聞こうとは思わなかった(p. 118)。

これは、津軽人として誇りを持っていた太宰だが、その反面理由もない偏見にも抵抗感を持っていた事が読み取れる場面である。

以上の内容だけでも、津軽の外ヶ浜ルートでは太宰の人柄を推測できる場面が多く含まれているといえよう。

4-2. 『津軽』の中の外ヶ浜, 津軽

次に、津軽外ヶ浜ルートには津軽がどういうところか、津軽の特徴と魅力が多く紹介されている。主な内容を大きく分けると津軽人、津軽の歴史、津軽の文化と自然について理解を深められる。

まず、『津軽』は津軽人について紹介する場面が少なくない。津軽人がどういう人か、津軽人のアイデンティティを確認する事ができる。太宰は津軽への旅が津軽人を理解するためであると、次のように述べている。

言いかたを変えれば、津軽人とは、どんなものであったか、それを見極めたくて旅に出たのだ。私の生きかたの手本とすべき純粋の津軽人を捜し当てたくて津軽へ来たのだ。そして私は、実に容易に、随所においてそれを発見している(p. 47)。

このように太宰の津軽の旅は津軽人とはどういう人だったのかを見極めて改めて知りたかったのである。またそれが、津軽を旅するなかで自然に感じる事が出来たと振り返っている。津軽人に関しては特に外ヶ浜で多く語られてある。

蟹田の人たちは温和である。温和というのは美德であるが、町をもの憂くさせるほど町民が無気力なのも、旅人にとっては心細い。天然の恵が多いということは、町勢にとって、かえって悪いことではあるまいかと思わせるほど、蟹田の町は、おとなしく、しんと静まりかえっている(p. 56)。

ここでは津軽人の一つの特徴としてよく言えば温和で、悪く言えば無気力であると紹介しているし、これは自然の恵みと関係があると紹介している。そして津軽人のもっとも特徴的な性格を次のように紹介している。

私は決して誇張法を用いて描写しているのではない。この疾風怒濤(とどう)の如き接待は、津軽人の愛情の表現なのである(p. 68)。

読者もここに注目をしていただきたい。その日のSさんの接待こそ、津軽人の愛情の表現なのである。しかも、生粋の津軽人のそれである(p. 69)。

ここでは蟹田でSさんのお家を訪問した際の経験を基に津軽人の特徴を説明しており、その特徴が自分にも根強く残っていることを告白している。即ち、津軽人はいかに情け深いかを見せている。

それ以外にも津軽、特に外ヶ浜地域の歴史についても詳しく書いてある。津軽、外ヶ浜の歴史に対する主な内容は次の通りだ。

(中略) この外ヶ浜一帯は、津軽地方において、最も古い歴史の存するところなのである。そうして蟹田町は、その外ヶ浜において最も大きい部落なのだ(p. 41)。

竹内運平という弘前の人の著した「青森県通史」によれば、この蟹田浜は、昔は砂鉄の産地であったとか、今は全く産しないが(中略)(p. 41)。

この山脈は、全国有数のヒバの産地である。(中略)昔から、日本三大森林地の一つとして数えられているようであって(中略)。この津軽半島の脊梁をなす梵珠山脈は、ヒバばかりでなく、杉、山毛櫨(ブナ)、檜(なら)、桂(かつら)、橡(とち)、カラ松の豊富をもって知られているのである(p. 53~56)。

干鱈(ひだら)卵味噌のカヤキ、(中略)とにかく、これは先住民アイヌの遺風ではなかろうかと思われる。私たちは皆、このカヤキを食べて育ったのである(p. 69)。

(中略)この辺には昔の蝦夷の栖家の面影は少しも見受けられず、お天気よくなってきたせいとか、どの村落も小綺麗に明るく見えた(p. 87)。今別は前にも言ったように、明るく、近代的とさえ言いたいくらいの港町である。人口も四千に近いようである(p. 93)。

このように津軽の歴史、昔の様子などについての紹介がある。外ヶ浜ルートを廻りながら、ここで紹介されたことを確認しながら、どのような変化が起きているのかを確認する事ができるだろう。

さらに、津軽外ヶ浜の食べ物や文化、自然についても詳しく紹介している。主な内容を見てみると次の内容がある。

東北の海と言えば、南方の人たちはあるいは、どす暗

く険悪で、怒涛逆巻く海を想像するかもしれないが、この蟹田あたりの海は、ひどく温和そうして水の色も淡く、塩分も薄いように感ぜられ、磯の香さえほのかである。雪の溶け込んだ海である。(中略) さまざまの魚が四季を通じて容易に捕獲できる様子である。(中略) 蟹をはじめ、イカ、カレイ、サバ、イワシ、鱈、アンコウ、さまざまの魚が四季を通じて容易に捕獲できる様子である(p. 51)。

蟹田はまた、すこぶる山菜にめぐまれているところのようである。蟹田は海岸の町ではあるが、平野もあれば、山もある(p. 52)。

(中略) この外ヶ浜地方を、カゲ(山の陰の意)と呼んで、多少、あわれんでいる傾向がないわけでもないように思われる。けれども、この蟹田地方だけは、決して西部に劣らぬ見事な沃野(よくや)を持っているのだ(p. 52)。

(中略) 昔から、日本三大森林地の一つとして数えられているようであって(中略)。この津軽半島の脊梁をなす梵珠山脈は、ヒバばかりでなく、杉、山毛櫨(ブナ)、檜(なら)、桂(かつら)、橡(とち)、カラ松の豊富をもって知られているのである(p.53~56)。

干鱈(ひだら)卵味噌のカヤキ、(中略) とにかく、これは先住民族アイヌの遺風ではなからうかと思われる。私たちは皆、このカヤキを食べて育ったのである(p.69)。

このように外ヶ浜の自然と食文化を紹介している。外ヶ浜、特に蟹田の場合、海からだけではなく山からも畑からも恵みが豊かである事を説明している。

5. 結び：外ヶ浜ルート可能性と課題

5. 1 太宰と津軽の繋がり

『津軽』の外ヶ浜ルートを実際に廻り、『津軽』も読み直してみたところ、上述したように太宰、津軽人、津軽の歴史、津軽の自然が繋がっていることが見えてきた。これはまさに太宰のアイデンティティ、太宰がどういう人かを理解するうえで大事なヒントになる。

まず太宰は何回も繰り返しているが自分は津

軽人であることを強調している。今回の旅も津軽人である自分のアイデンティティを確認するためであると明言している。

都会人としての私に不安を感じて、津軽人としての私をつかもうとする念願である(p. 47)。

そして、蟹田でのSさんの言動を津軽人の特徴と紹介して、自分もいかにそのような性格かを例を挙げながら説明している。

さらに、太宰自身を含む津軽人の人柄、性格は津軽の自然、歴史と強く繋がっているのを強調している。すでに紹介したが蟹田では「天然の恵みのため人々の性格がおとなしく、しんと静まりかえっている」と述べている。豊かな自然がこの地域に住む人々の性格に影響を及ぼしていると説明しているのだ。また、「生まれ落ちるとすぐに凶作にたたかれ、雨露をすすって育った私たちの祖先の血が、いまの私たちに伝わっていないわけではない」(p.83)と述べて、厳しい自然環境が現在の津軽人の性格に影響を及ぼしていると考えている。

このように、太宰自身は津軽人であり、津軽人は津軽の歴史、自然からの影響を受けて今日に至っていることを淡々と物語っている。

5. 2 『津軽』の外ヶ浜ルートの課題

『津軽』の外ヶ浜ルートは太宰の理解、地域の理解、そして観光資源としての可能性があるが、課題も少なくないのが現実である。この外ヶ浜での太宰の旅はそれほど知られていないほか、特に蟹田から龍飛崎までの『津軽』外ヶ浜で太宰の旅を追体験できる観光プログラムが開発されていないのは残念である。また、青森、蟹田、龍飛崎までは距離がかなりあるが、このルートで利用できる公共交通がないのも課題である。それ以外にも地域住民たちがこのような可能性に気づいていないのも克服すべき課題である。

このような課題を解決するためには、太宰治の『津軽』に出てくる場所を軸に、外ヶ浜の魅力を感じられるルートの観光資源としての可能性について真剣に検討されるべきではないだろうか。このようなルートの開発は青森の文人、太宰治ゆかりの地の旅をつうじての純粋な彼の理解と外ヶ浜

地域の活性化にもつながるに違いない。そのためには、外ヶ浜ルートを開発して、『津軽』で出てくる太宰と津軽の特徴を体験できるプログラムの開発がなにより必要であるといえよう。

参考文献

牧野和香子・柳澤良知 (2019) 「小説『津軽』丸山

旅館で鯛を料理した女中さんの調査」, 上磯の文化 (2), 128~134

引用文献

太宰治 (1957) 『津軽』角川文庫, 東京.

The possibility of Osamu Dazai 's *Tsugaru* Sotogahama route as a tourism resource

KIM Yisung

Faculty of Sociology, Aomori University

要 旨

本研究では太宰治の小説『津軽』外ヶ浜ルートの可能性について、現地の調査を通じて検討した。『津軽』は太宰治が出版社から頼まれて、生まれ育った津軽地域を旅した内容を小説化した作品である。特に外ヶ浜を訪問した際のエピソードや訪れた場所は、太宰と地域の理解につながる可能性があることを確認できた。しかし、外ヶ浜での太宰の旅はあまり知られておらず、太宰の追体験ができる観光プログラムもない。太宰と津軽の特徴を体験できるプログラムの開発が急務である。

キーワード : 太宰治、津軽、外ヶ浜、アイデンティティ、観光資源